



一貫コース通信

国際理解講演会の意義と補足（共感は絆の一つ）

初めに断っておかなければならない事がある。これから記す総てのカテゴリズは、私という素人の戯言として許容して戴く事をお願いしたい。国際化と同意に取られがちな言葉にグローバル化がある。本来の意味合いはどちらかと言えば、様々な人の流れが齎す効果の中で、主に経済（お金の流れに）に軸を置いた用語であった筈である。しかし、この言葉の本来の意味や、地球上の国の名前もテーゼとしての国名(民主主義共和国・連邦国・王国・人民共和国等…色々あります)すら、現在はそんなモノにいちいち拘る時代ではないと思われる。しかしながら、これまで、果たして人類はどんな回り道をしてきたのだろうか。

随分前には、冷戦状態が歴然と存在していた。西側 VS 東側(自由主義経済 VS 完全管理主義経済)とか、背景（理論武装）としてのイデオロギー(今や死語に近い)の枠組みの中での交流が。しかし、意味の感じられない枠組みの崩壊は、今日の情報化の中で起こったと言って過言ではない。自分達の優位性の証明が、相手の誹謗中傷や、隠す事でのみ保たれていた時代から、今や瞬時に拡散される情報システムの構築で、とても隠し通せなくなったからである。つまり、どの国に属しているか、地域はどのエリアか等は、殆ど意味をなさないかも知れない。思うに、その事で生じた良い点は沢山あるが、枠組みに縛られないヒト・経済・文化の交流（質・量・速度…etc）が指数関数的に円滑になったと理解する。今、私達が生きている世界の実相は、こう言うモノだと思ふし、一種のパラダイムシフトと言って良い。

改めて言う事ではあるが、本校は研修旅行先を海外に求めている。ではその意義は何か？端的に言えば、何時の時代も“本当の姿は中々見え難い”と言う言葉に例える事が出来るかもしれない。例えば、情報化に付随し、蔓延した言葉にバーチャル・リアリティーがある。様々な映像が撮られ、それらを技術的に組み合わせ、時には加工し鮮明に描き出されたりするが、実は、それは本物ではない。私達を魅了する事は在っても、実態ではなく時に嘘で在る事すらも。そもそも人は、騙され易い存在なのだと考える。それでは、ヒトに必要な事は何なのだろうか。私は、実際の様態・姿などを見る事、触れる事だと考える。物事の本質に迫るには、本物こそ真実で…、先人、薩摩の西郷さんが“百聞は一見に如かず”と表現したのである。実際に、日本の国から飛び出して、2020年の世界の別の国の姿を見聞し触れる。そこから、果たして自分はこのままで良いのか等を、考える事が大切だと思うのだ。きっと、今の日本の実態や、自分の存在そのものも相対化して見えるに相違ない。本当にそれで良いの？…と。

これまでの講師の先生方は各界の重鎮である。身を挺して活動に邁進し、誰一人として自分だけが良ければ良いとは考えて居なかった。また、地球の一員として、ヒトと環境(自然)を深く愛し、これから生まれくる後世に対し強い責任を持っている人でもあった。その貴重な体験から、これだけは諸君にと…投げ掛けられたのだ。思うに、共感とは絆の一つである。

